

# 支那唐代銀器の三四に就て

梅 原 末 治

## 一

支那の唐朝盛時に一部に銀製容器の行はれたことに就いては、文獻に傳へるのみならず、我が奈良正倉院の尊藏中に存する銀壺其他の實物から推察されて來たことであるが、その國に於ける遺品に就いては今世紀に入るまでは殆んど絶無と言ふてもよい状態に置かれてゐた。處が明治の末年になつて汴洛鐵道工事に伴ふ洛陽附近に於ける古墓の發現に依つて唐代の明器なり陶器が多數に見出され世人の注意に上り、それ等が洋の東西に亙る古美術愛玩者の趣好に投ずるに及んで、新たに同種遺物を得る爲に古墓私掘の風を助長し、ここに洛陽北邙山古墳群をはじめとする各地の古墓の檢出となり、唐盛時の夥しい遺物を發見するに至つたのである。是等の出土品は右の盜掘の因由から當初取り上げられたのは明器陶器の類であつたと言ふまでもないが、作業の間自ら共存の爾餘の類にも注意が及んで、古くから彼の國人の愛玩した鏡鑑に新資料を加へ、ここに擧げ

支那唐代銀器の三四に就て

ようとする銀器なども檢出せられることになつて、今や腐朽する物質で作られたものを除く各種の遺物を見得るの状況に立到つた。されば從來我が正倉院の御物を主要な材料として考へられて來た唐代上半の文物觀に對して、これ等の遺品が一層直接的な資料たる點で當然注目せらる可きものなること多言を要さないのである。尤も是等の遺品は孰れも射利の徒の私掘に係り、また商品化して東西の古美術愛好家の蒐集對象となつてゐる關係から、學術上の價值に於いて遺憾な點が多く、なほその間に多くの偽古の器や、修補のものを見るなど甚だ好ましからぬ面を持つてゐる爲に、我が學界では、なほそれ等に對して充分な考慮が拂はれないと云ふ傾向を見受ける。併し是等が他の面に於いて歐米の學者に依つて取り上げられた處から、關係所見の一部がそのまま引用せられてゐるのを省みると、吾々が關係の遺物自體に就いて觀察を行ひ、それから出發して技術上の特徵なり性質の考査を行ふことは、既に游離した遺品に對し學術上の價值を再現するものとして、兼てまた、これ等の明に支那で作

られた遺品の示す所から遡つて正倉院御物の性質を考へる上にも示唆する所蓋し鮮少なからざるを思ふのである。本小編は右の一例として銀器に對し、囑目した彼地出土の精品若干を紹介すると共に、それに聯關して考へ及んだ一端を録したものに外ならぬ。

さて支那本土發見に係る銀器としては、大正の末年に倫敦の British Museum が購入した十五器より成る一群を以て最初の目星しものと云ふ可きであらう。是等は種々の違つた器形を含んで居り、時代は下るが、器の一つに「乾符四年王大夫置造鎮司公廨重二兩半分」なる刻銘があつて、製作年代を確め得る點に加へるに、博物館で古色を洗ひ去るまでは全く出土の原形を保ち、且つ出土地に就いても陝西省西安府北邨山 (Pei Huang shan) にある古墳とする所傳を伴ふ所から、<sup>(1)</sup> 廣く東洋古美術愛好者の注意を惹き、我が國でも後藤守一氏の詳しい紹介文を見た程であつた。<sup>(2)</sup> 右の一群の銀器が刺戟を與へたかどうかは知らないが、その前後から同様な銀器が歐米で觀賞される傾向を示して、筆者が彼地に掛けた際彼地の博物館や個人の東洋美術收藏家の許で、可なりの數の遺品を目受けた。而して是等が昭和の世になつて唐代の工藝技術を示すものとして段々と著録せられるに至つたのである。大阪山中商會の出版に係る歐米の關係品を蒐めた『唐宋精華』には比較的多くの此の種銀器を録して、原田博士の解説を載せて居り、また論攷では獨逸の『東洋美術雜誌』 (Ostasiatische Zeitschrift) に所掲の Graf. Strachwitz の “Chinesisches Yang-Silber und ost-westliche Kunstbeziehungen”

の如きものなどがその一例として擧げられる。併し筆者の實物に就いての所見からすると、是等の遺品は若干例を除くと、大部分が初に記した偽古の器であつて、<sup>(3)</sup> それ等が充分な検討を加へられることなく眞實な唐の作品として取扱はれ、その上に論述が行はれてゐるのは、學術的見地から遺憾なことと言はねばならぬ。ここで此の様な游離した遺物を取扱ふに當つて先づ實物自體に就いての周到な觀察の必要が痛感される次第である。

右と前後して我が邦に齎された銀器では、その質と量とに於いて御影嘉納治兵衛翁の有に歸したものが首位を占めること『白鶴帖』第一冊圖版の明示してゐる所であり、爾後更に佳品を加へ、うち七點は重要美術品に認定せられて、洋の東西を通じて此の種の最も著しい收藏たるの實狀にある。ただ是等の遺品は通じて形が小さく、正倉院尊藏の銀壺以下の器の様な大形品がなく、延いて硝子越の陳列に依る觀賞だけでは、技巧の細部や構圖などに關する詳しい觀察が困難である。筆者は幸にも是等の實物を親しく調査する機會を得た上、羽館易君の手で擴大寫眞が撮影せられ、兩者を通じて銀器の持つ性質を認め得るものがあるのを思ふに至つたので、以下本題では便宜右のうちの主要な器を對象にとつて支那出土銀器の代表として記述を進めるであらう。

## 二

是等の銀器に於いて先づ擧ぐ可きはいま白鶴美術館の所藏となつ

てある一個の鉢である。本器は既に『白鶴帖』の第一冊に載せて居り、龍池鴛鴦雙魚華文洗として昭和十年五月に重要美術品に認定せられたものである。口径四寸八分の器は低い圓足を伴ふた完好な浅い鉢形をして、その外側に十四葉の蓮花形を打出して、單調な形に變化を與へてゐる外、内底に靈池の圖様を表出した點が注意される。この内面の靈池は外に打出された蓮葉の凹みに圍まれた間に、線刻で流動の著しい池水を描き、中央に首をもたげた龍を牛肉刻となし、これを繞つて鴛鴦・雙魚・鯰と覺しい圖形が同じ手法で寫し出されてゐるもので、器本來の用途に、聯關しながら、思ひきつた意匠をなす。そして是等の配置が必ずしも左右均勢でなくて、而も統一を保つた處技巧と相俟つて觀者の興味を呼ぶものがある。内面底部の右の圖様に對して本器の外側は飾るにすべて所謂ケリ彫の細緻な文様を以てしそれは外底にまでも及んでゐる。即ち打出された十四の花瓣上をば華麗な寶相華文を以て飾り、その上下の間地には草花飛雲に禽獸を配して、埋めるに魚子地を以てして居り、圓足の外側には花唐草、底面では一個の花形を中にして巧みな寶相華花文を布置して、間然する所のない寶飾をなすのは蓋し類稀なるものとする。その細部に就いては圖版に挿入した各部の寫眞に譲つて省略に従ふが、通じて唐盛時の華文の特徴を具象するものが整齊にして美事な布置を示し、而も一々のケリ彫の線が雄勁な趣を具へた所、魚子地の整ふた點と共に、技巧の上で注記せらるべきであらう。なほ是等の草華文には通じて鍍金を施して金銀色繪としてゐて一層器に鮮か

な色彩觀を與へてゐることをも舉ぐ可く、これは以下の銀器に於いても一樣に見られる所である。

第二に舉ぐ可き臺附杯は口径二寸九分、高さ一寸八分と云ふ現代の洋酒杯に相近い大きさのものである。但し杯部は割合に淺くて六瓣の花形に作られ、それを受けた臺部から外開きの同じ花形の安定な脚を出してゐる所に特色があつて、その形たるや美しい。この器また側面を飾るにケリ彫金銀色繪の圖文を以てしてゐて、それは狩獵文を主とする。器形に従つて六個の瓣を劃した杯部の下邊には臺受けを中にして寶相華文を刻し、また脚部もそれに應じて、蓮葉並に寶相華文の花飾りを附するが、杯側にあつては、花樹等を點在せしめた間に上下二段に狩獵の光景を刻出し、裝飾文を特色づける。その圖像は圖版第十一の下段に載せた擴大寫眞に見る如く、逃げる二頭の猪を追ふて今や矢を放とうとする光景を寫したものの(圖の左)、右の猪の上に反對の方向に疾驅した騎馬人物が棒を以て獸類を驅立ててゐる狀景(圖の右)、捕繩を以て羊を狩らうとしてゐる人物や(圖の左)、槍とも見ゆる長い武器を執つて驅る騎馬像、逃れんとする二頭の鹿を追ひつめて、その一頭を射止めた瞬間を寫したものの(圖の右)など、うちに騎馬に依るさまざまの狩獵の光景が見出されるのであつて、それ等が孰れもこの小さな器側にいき／＼と力強く恰も繪畫を見る様な具合に刻出された點で觀者の興味を唆るものがある。

狩獸の圖を裝飾に用ゐることは、早くから支那人の間にも行はれて、車馬に依るそれが漢代大形空博の押型文などに表はれて居り、

唐朝に於ける例としては唐鏡の背文が<sup>(5)</sup>挙げられるのみならず、我が正倉院尊藏の銀壺文が同じ時代の最も立派なものとして早くから東西の學界に知られてゐる。この鏡背なり銀壺の狩獵文は圖柄なり、狩人の服飾など種々の點で本器と相似て、そこに自からなる時代相を示すが、殊に正倉院の

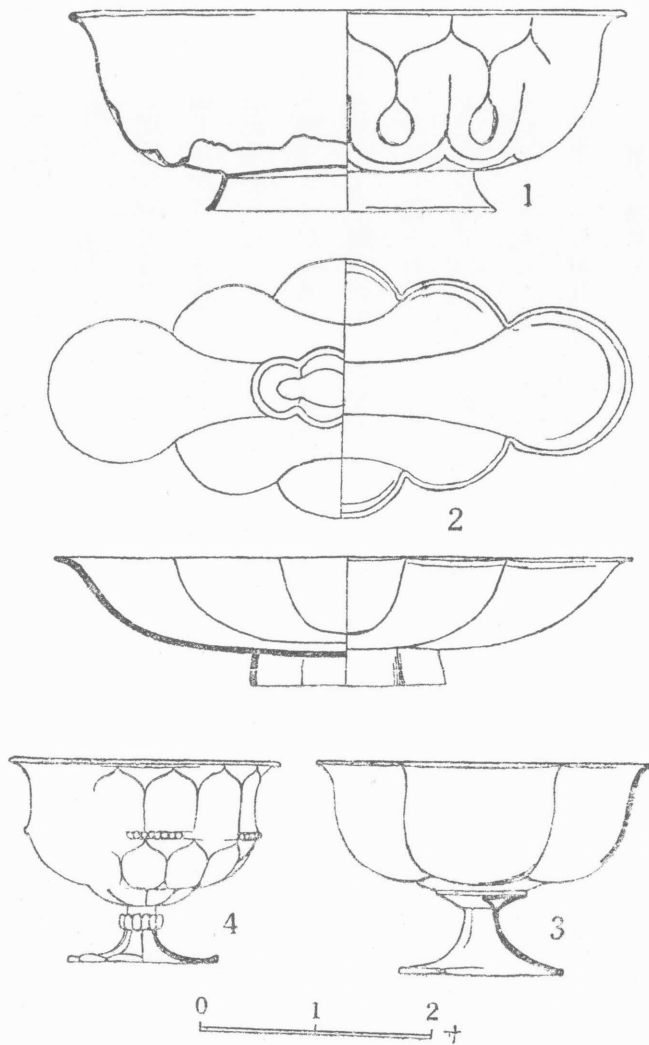
銀壺は大きさや形こそ違ふてはゐるものの、同じく銀製の器であるに加へて、花樹の間に狩獵圖を同じケリ彫で表はし、間地を魚子地で埋めると云ふ細部に至るまで符節を合せた如く一致することが注意されるのである。處が同じ銀製で狩獵の刻文のある支那中原の出土品が二つあること(Graf Strachwitz氏に依つて紹介せ

られてゐる。一つは伯林國立博物館東洋美術部所藏品、他は倫敦のBritish Museum 所藏に係るもので、<sup>(6)</sup>また一見同巧の器たるを思はしめる。併し筆者が前年實査した所からすると、伯林の器は上に挙げたと全然同様な技法を以てした佳例なるに對し、他の一つは同じ

外觀を呈しながら、刻法が違つて、生氣に乏しい所、器形の鈍重や古色を缺く點などに併せ觀て、初に觸れた近頃の贋作例とす可きことを思はしめるものであつた。されば本品は前者と並んで出土地の局部こそ明でなく、また小さな器ではあるが、現在支那出土の著例として、正倉院の銀壺

と併觀せらる可き同文の器と云ひ得るであらう。

支那出土の銀器や狩獵文が正倉院尊藏の銀壺と類似することは、伯林器の記述に當つてその紹介者の既に説き及んでゐる所であるが、いまこの新出の器を見るにつけ一層その感を深くするものがある。但し圖版第十一に



載せた細部の寫眞をば改めて『正倉院御物圖錄』第十二集に收められた銀壺文と比較すると、外面的な圖柄の一致の他に技法の細部の點でいろ／＼と違つた點のあることが新たに氣附かれて來る。全く同様な狩獵の光景でありながら、銀壺のその刻線が可なり軟か味

藏氏衛兵治納嘉 庫兵

杯長曲八文鳥花金鑲製銀(一)

藏氏衛兵治納嘉 庫兵

杯附臺形花八文鳥花金鑲製銀(二)



藏氏衛兵治納嘉 庫兵

杯附臺文華獸禽金鑲製銀(一)

藏氏衛兵治納嘉 庫兵

杯附臺形花六文鳥花金鑲製銀(二)





を帯びて居り、また形に於いて彼のひきしまつた整齊さに及ばざる所のあるが如き、更に空間を埋めた魚子地や、樹木に於てその傾向の著しいものがあつて、俄かに同一視し難いことが認められる。處が支那出土に係る伯林の器はここに記するものと全く同じく、なほ魚子地その他刻文に於ける同じ技巧が支那出土の銀器に通じたこと本文録する諸器の示す如くであつて見れば、正倉院尊藏品は同じ系統の器たるに誤りはないとするも、右の違ひをば、その我が國に存する點と結びつけて、前者に基く奈良朝に於ける製作とする解釋を描かしめることになる。これに就いて二器を數へるその器の示す形がなほ彼土に類例の乏しい鐵鉢形であることや、その各に圓座の基臺を伴ひ、一方には

東大寺銀壺重大五十五斤、甲、蓋實并臺重大七十四斤十二兩、天平神護三年二月四日。(器銘)

東大寺銀壺重大十二斤、甲(座銘)

なる刻銘があり、他にも

東大寺銀壺重大五十二斤、乙、蓋實并臺重大七十斤十二兩、天平神護三年二月四日(器銘)

東大寺銀壺臺、重大十斤十兩、乙(座銘)

なる銘文があつて一層その然るを思はしめるものがある。然らば本器はその點で正倉院御物の觀察にも一つの役立ちをするものと云ふ可きである。

紹介しようとする第三の器は八曲長杯と呼ばれるものである。その大き杯部の長軸が五寸、高さ、一寸一分を示し、縁が八つの弧線

から成り、器體またそれに應じた浅い杯部に、同じ恰好の短い器脚を添へたところ、容器として珍らしい形と言ふ可く、その器側から臺部の内底に互つて前二者同様また細緻にして雄勁な寶飾を施す點まことに華麗である。この裝飾文は圖版第十七の上に示した様に、主要な杯部では左右の所謂二曲と前後のそれに寶相華の花文を布置したに對し、中間の曲側には花樹の間に禽鳥を點綴して、並列狀をなす下邊の樹木の下には岩山が刻出されてゐて一種の山水繪たるの趣を加へ、唐鏡文との同似を示すものがある。而して是等の圖形にはすべて鍍金を施し、空間に細かな魚子地を打つてゐる點他と異なる所がない。

一體この種の長杯はもと何と呼ばれたか明でないが、正倉院の南倉に「金銅八曲長杯」と傳へる同じ器が三點遺存し、中倉にまた玻璃を以て作つた十二曲の遺品も存するので、早くから世に知られて、一部人士をして、自らその本邦製作たることを思はしめた。これに對し前年原田淑人博士は同じ器が支那内地のみならず、ポーランドの東部から出土してゐるもののあることを擧げて、唐代に於ける東西文化の交渉を觀る一資料とせられるに至つて興味を新たにしたものと言ひ得る。右の舉例中支那出土と傳へる紐育メトロポリタン博物館所藏の鍍金人物花文八曲銀杯は種々の點から器の眞偽に就いて疑を挿むべき餘地の多いものであるが、他の雙鯉文八曲銀杯は作りはさまでよいとは云ひ難いが確かな支那出土例とすべく、ここにより整美な本例を加へてその示す器形が正倉院の金銅品に一致

し、飾るにか様な優れた寶飾を施されたものであることは當然注意せらる可きであらう。序に管見に上つた同じ器例を挙げると、支那出土品では紐育のホイット氏の蒐集品中に正倉院御物を髣髴せしめる金銅製品があり、また序言に記した British Museum 購入の一群の銀器中にもそれが存する<sup>(8)</sup>、西方に於ける發見例としてはレニングラードのエルミタージュ博物館に、臺脚を缺くが上記の支那出土品と相似た魚文のある銀製の八曲長杯と、金銅の十二曲長杯とが收藏せられてゐて、<sup>(9)</sup>後者はポルタバ (Poltava) の出土と云ひ、共に原田博士の舉例よりも支那出土品に近いものである。

この種の長杯は器形が珍らしく、西方では支那の唐以前に遡る時代の四周の古文化圏にその存在が知られてゐないのに反し、支那では戰國時代から倍なる楕圓形の杯があつて、漢代にその漆製品の盛行したことがよく知られてゐる。いま如上の現存例に就いて見るに、器形や作りの上では本遺品が正倉院御物の金銅器やホイット氏收藏品と並んで最も整つた形を示すに對し、もとユーモルフオポロス翁の所藏した双鯉文の一式は、杯部の長軸の兩端の緣部が稍々上つて見え、また臺脚の高さを加へて居り、作りも粗であり、British Museum の一群の器に含まれた遺品に至つては更に脚の高大化が目立ち、杯部の形も便化したことが知られる。これ等に較べると北歐出土の諸例は正倉院の一群に近いが、而も作りが厚手で、鈍重な感が多く、殊に臺脚の恰好が可なり拙に見える。然らばそれをば正倉院の年代と倫敦の一群の器のうちに唐末乾符四年の銘のある點など

と併せ考へるに於いて、原田博士は保留してゐられるが、東西に分布する是等の器は、支那で考案されて東方のみならず西方にまで及んだとする推測は大體論としては認せらる可きであり、なほ初に記した支那出土品に見る形の差異が、年代に依る推移とすることも想定せられ得ると思ふ。ここでその自からなる結果として支那出土の本器と全く同じ正倉院尊藏の八曲長杯金銅器は文様こそないが、支那からの舶載品とする推測を加へ得るわけであり、また兩器の聯關から游離した支那出土のこの器が唐代盛時の作品たることに蓋然性を與へることになる次第である。

第四以下の三個の銀器は孰れも第二に舉げた器と相似た形の臺附杯であるが、それ／＼に小異が存し、また裝飾文も同じでない。圖版第十八の下に載せた六花形杯は、口徑二寸五分餘、高さは一寸七分あつて、第二の器に最も近い形のものながら、花形をした杯の下に特別な受部が作り出されてなく、直ちに本<sup>もと</sup>が細く下方に喇叭狀に開いた脚となる所に違ひがある。右の外形に従ふて瓣毎に劃された杯側を飾る主文は、如何にもよく施轉した美事な蔓唐草華文と花樹に禽鳥を配した刻畫とを交互に圖してゐて、その意匠たるや第三の長杯と同じく、手法その他も相似てゐる所自からなる時代相を看取せしめるものがある。この器の銀質、一部分鏽化して、現在口縁に少許の缺損を生じてゐるが、面の金銀交色は鮮かな土中古の趣を保つて、よく發見當初の面影をのこしてゐる。

圖版第十七の下の杯また右の器と略々同様の土中古色を持つたも

ので、その大口徑二寸五分餘、高さ一寸八分あり、形も似てゐるが、本器は杯脚を通じて八花形をした點に小異がある。その裝飾文は杯部の各瓣を通じて、花樹に禽鳥を配して居て、多くは中央に大きな禽形を寫し、種々の姿態をしたそれに構圖の主點を置き更に、上邊に禽鳥を飛ばせたものである。この圖文は上來の器に見ると同様であるが、描線のいくらか軟味を帯びてゐる様に見えることは附記すべきであらう。

今一つの器は杯部の口縁は丸いが、器側の下方に珠點連續の突帶を作つて、上下を劃し、その各に十個の花形を薄く表出した所、臺脚の上邊に突帶を繞らした點と併せて、この種杯中形の最も整つたものに屬する(圖版第十、八の上)。尤も器の口徑は二寸四分に近く、高さ一寸八分で、大さは他のものと違つてゐない。主要な杯側の裝飾文はまた花樹に禽獸を配したものはあるが、本器にあつては上邊の花瓣の中央に刻出された禽獸には、通有な禽形の外に疾驅した猪や虎・双兔などが寫實的に表はされて居て、その猪の如きは特に目立つて居り、また下邊の瓣中の花樹には岩上に生ひ立ち、それに禽蝶が點綴せられたものなどを含み、これ等が瓣間の空地に草花を布置した點と共に裝飾上の入念さを示す。されば形と併せてこの種杯中の佳品と言ふ可きであらう。

以上の外圖版には省略したが、同じ嘉納氏の藏品に、なほ一つ最後に録した器と似て、器側並に脚に突帶なく、側面を八花形に作つた杯がある(口徑二寸餘、高さ一寸六分)。その裝飾文は唐草華文と

禽鳥花樹文とを交互に表はした點で、上記杯の二に近い。但し銀面の銹化が著しくて、いま通體小豆色を呈し、爲に圖文鮮明を缺く憾がある。是等の諸器が昭和十三年六月廿二日すべて重要美術品に認定せられたのは、か様にそれ／＼優れた技巧を示し、出土後の修補などのないことに基くもの、固より當然な處置であらう。

### 三

前段で紹介した七個の銀器は、その數に於いて必ずしも多いものではなく、また器形に於いて臺附杯、鉢の類に限られて居り、延いて唐盛時の銀器の實際を傳へるになほ極めて不充分なことを要しない。併し是等の器がすべて確實な遺品たることから、その間に通じて見られる技巧や裝飾文の特徴は一つの通性として、他を類推するに役立つことが當然考へられて然る可きである。これが筆者の特に紹介を試みた所以に外ならぬ。唐朝の盛時にこの種の器の盛行したことは原田博士の夙に引證されてゐる『安祿山事蹟』卷上に記する

所賜祿山食物香藥皆以金銀器盛之、其器並賜、前後又不可勝計也

なる一條から推されるのであつて、從來これが實例としては初にも記した様に我が正倉院尊藏の諸器が擧げられて來た。處が新たにこの様な諸器が支那で見出された以上、よしやそれ等が出土地に關する所傳を缺くとしても、手法その他の諸條件に照して見て、是等こそ右の文獻に相應する實物とす可きであり、當代銀器の實際は是等

に依る可きことに疑義を挿す餘地はなからう。

いま右の見地に立ち、是等の器に通じた技巧を以て新たに正倉院御物の同種の銀器に較べるとなると既に解説の條に觸れた如く細部の上に俄かに同一視なし難いものがあることが氣附かれる。尤も他方我が國發見の銀器中には例へば奈良興福寺の金堂下から出た銀杯<sup>(10)</sup>の様に、本文に記したと全く技巧を一にしたものも見受けられるが上に、上記八曲長杯と同巧の金銅器が正倉院の尊藏品にあることも併せて注意せらる可きである。さればこれまで正倉院御物即ち唐盛時の文物なる前提の下に唐朝文獻との對比を試みて來た一部東洋美術史家の所論は、その根柢に於いて、實物の再検討を行ひ、それ等の中から支那自體のものを究めることが改めて要請せられるわけであり、同様にそれがまた從來困難視されてゐた正倉院御物の實物に即するより、周密な検討に對する一つの手掛りをも示唆するであらう。この後者たるや、支那出土の唐代文物の示す實際が知られることに依つて、正倉院御物のうちに存在の豫想せられる我が奈良朝人の手になる工藝品をば彼土からの將來品と區別する實物上の據所を與へるに役立つことが考へられる爲である。

右の所見について本文に挙げた一群の銀器が略々同じ技巧を示すにつけて、早く知られた倫敦 British Museum 藏する同じ支那から出た唐末の一群の銀器が、それ等に較べて稍々著しい違ひを示すことが同じく考慮に上つて來る。これに就いては既に八曲長杯の條で、倫敦の銀器にあるその一例が形の上に示してゐる違ひを以て、

年代に依る變化の結果であると考へたが、器の作り乃至裝飾文の表出等にあつても同様なことが認められる。特にその裝飾文が大まかになつて精緻に缺けたときは明に時代に依る違ひを示すものとして、將來是等から唐代に於ける銀器の變遷が實物から推し得るの可能が考へられるのである。一體金銀器としてはここに取扱ふ唐代のそれが特に著名であるが、十年このかた世に出た實物からすると、早く戰國時代の製作と認む可き遺品が少くない<sup>(11)</sup>。されば是等の實體を先づ究めて、それ等に基いて關係の技術の變遷推移を辿ることが、考古學上行ふ可き當然な仕事であらねばならぬ。この小編から出發してか様な綜合に到達せんこと筆者の切なる希求である。

〔註〕 (一) R. L. Hobson: A Tang Silver Hoard (The British Museum Quarterly, No. 1, 1926) 尤も是等の出土地の所傳に就いてはホブソン氏の記するまゝを録したが、北邨山なるものは洛陽附近にある山名で、西安府附近にか様な山丘がない様であるから、そこに傳への不確實なことが窺はれる次第である。北邨山なる所傳に據るとすればやはり洛陽附近の發見であらうか。

(二) 後藤守一氏「大英博物館所藏の唐代金銀器」(『考古學雜誌』第二十卷第三號) 參照。この論文は多數の細部を示す寫眞を併せ掲げてゐて、從來發表の本一群銀器の最も詳しい記載とする。

(三) 『唐宋精華』收むる所の主な銀器は上卷の歐洲の部に約十點、下卷の米國の部十數點に上る。併し後者では僅かにメトロポリタン博物館所藏の銀薰爐がよきやうに思はれるに過ぎない有様である。

(四) 昭和九年八月刊行の『白鶴吉金集』の圖版第三十三にも收録してゐる。

(五) 廣瀬治兵衛氏「狩獵文鏡の將來」(『考古學雜誌』第十一卷第十一號) 梅原「歐米で觀た狩獵文鏡」(同誌第二十卷第三號「歐米に於ける支那古鏡」所收) 參照。

(六) 序言に挙げた氏の論文に附した第二圖及第七圖の器がそれである。

(七) 原田淑人博士「正倉院御物を通して觀た東西文化の交渉」(史學會創立五十年記念

『東西交渉史論』所掲、『東亞古文化研究』所收)

(8) 上記後藤氏の文に見ゆる第六・第七の兩圖に示したものがそれである。同氏の文には單に銀製杯とある。

(9) 昭和五年夏の實見に基く。その詳細は他日別に紹介するであらう。

(10) 『興福寺大鏡』参照。

(11) 梅原『洛陽金村古墓聚英』参照。